

明治大正期「伊藤忠」の海外展開における要員

木 山 実

はじめに

- 1 初代伊藤忠兵衛時代
 - 2 2代目伊藤忠兵衛時代
 - 3 伊藤竹之助の功績
- むすびにかえて

はじめに

本稿では、現在の大手商社のなかでも伊藤忠商事と丸紅をとり上げ、両社の源流が明治後半期から大正期にかけて海外に支店や出張所を設けて海外展開した際、そこで必要とされる要員をどのように確保し、充当したのかについて考察したい。

現在の伊藤忠商事と丸紅は、いずれも近江商人であった初代伊藤忠兵衛が幕末の1858（安政5）年、15歳の時に麻布の持ち下り商いをしたことをもって創業としている。つまり伊藤忠商事と丸紅は源流を共有している。第一次世界大戦による好景気の時期、伊藤忠兵衛家の事業を統轄する持株会社伊藤忠合名会社の傘下に海外貿易を担当する伊藤忠商事と国内繊維問屋の伊藤忠商店がぶら下がる形になっていたが、それらが1920（大正9）年の反動恐慌の影響を受けて巨額の欠損を出してしまい、大幅な人員整理と業務縮小を行うべく21年にかけて、海外貿易を担当した伊藤忠商事は貿易部門を切り離して別会社大同貿易とし、主力の綿糸布取扱いに専念することで再建を目指し、国内繊維問屋の伊藤忠商店は伊藤忠兵衛家の親戚筋にあたる伊藤長兵衛商店と合併して丸紅

商店を設立することになった。このように分離していた伊藤忠商事と丸紅商店は、昭和の戦時期に三興、さらに大建産業の社名のもとに再統合したこともあったが、敗戦後に再び分離して現在にいたっており、伊藤忠商事と丸紅の関係は非常に複雑である（図1参照）。本稿の表題に伊藤忠商事を用いずに「伊藤忠」を用いているのは、このような複雑な関係を意識してのことである（以下ではこの「伊藤忠」という語をカッコを付さずに用いることにする）。

ところで貿易商社の経営においては、その海外業務を遂行できる人材の確保がきわめて重要であったことは改めていうまでもない。明治以降の日本の貿易商社史を概観すると、日本の商社は、海外の業務をその現地商人に委託する、いわゆる代理店制度をなるべく避け、海外支店を設けてできるだけ自社の社員をそこに派遣して駐在させるというスタイルをとってきた¹⁾。この場合、現地の言葉を話せて、貿易業務をこなせる人材の形成と確保は必須条件であったといっていよいであろう。

貿易商社の人材形成については、筆者はかつて旧稿²⁾において、呉服商・百貨店として知られる高島屋の貿易部門が1916（大正5）年に分離独立して商社高島屋飯田が成立する過程で、貿易業に必要とされる人材がどのように形成されたのかを考察したことがある。高島屋では当主飯田家が拠点を置いていた京都の地縁を活かし、地元の京都商業学校の卒業生をコンスタントに採用し、また京都出身で東京高商卒業生の竹田量之助を採用して厚遇し、この竹田の採用を契機として以後、東京高商卒業生もコンスタントに採用していった。そして当時はまだ珍しかったこれらの学校卒業生の中でも、東京高商出身の竹田量之助をまず1899（明治32）年にフランスのリヨンに派遣したのを皮切りに、盛んに海外に派遣して視察させ、一部の者は海外で開設した支店の支店長として

1) この背景には、政府がなるべく外商依存を避けて日本人に貿易を遂行させようと促し続けたことが大きいと考えられる。これについては、木山実（2009）第8章、若林幸男・大島久幸・山藤竜太郎編（2022）89頁などを参照されたい。

2) 木山実（2017）。

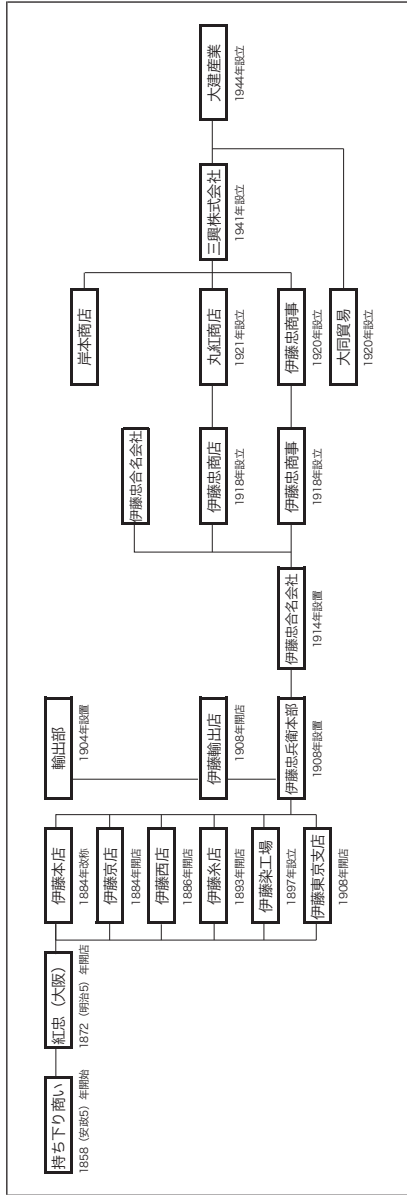


図1 伊藤忠兵衛家主要事業の変遷
 出所) 伊藤忠商事株式会社社史編集室編 (1969) 冒頭の「当社ノ沿革」などを参考に作成。

駐在させ、海外店舗網を構築していった。高島屋が店員を海外派遣する際には、全てのケースではないが、いくつかのケースで農商務省の海外実業練習生制度を活用したことが特徴として指摘できる³⁾——同制度は農商務省から海外赴任者の渡航費や滞在費の一部が支給されるというものである。そして明治末までにヨーロッパや豪州との取引の商権を構築した高島屋では、上述の京都商業学校や東京高商以外の学校の出身者をもコンスタントに採用していくようになり、1916年に貿易部門を高島屋飯田として独立させる基礎を築いていったのであった。高島屋（飯田）のケースは、高島屋の貿易部門が大規模化する以前のレベルでは、人材形成において地元（京都）の地縁が極めて重要であったことを示唆していよう。

明治期に貿易業に参入した伊藤忠も、その時点で規模はまだ大きくなかったという点で高島屋（飯田）と類似するところがあるが、伊藤忠が貿易業を展開するに際して、それに要する人材の確保という課題をどのようにクリアしたのかについて、以下考察を進めていくことにしたい。

1 初代伊藤忠兵衛時代

伊藤忠の事業は、初代伊藤忠兵衛によって1858（安政5）年に創始されたが、忠兵衛はその開業時から貿易事業をやっていたわけではなく、当初はもっぱら繊維製品の国内商業に従事した。近江（現、滋賀県）犬上郡豊郷村出身の初代忠兵衛は、そこに本宅を維持しつつ、明治に入ると大阪や京都に出店する典型的な近江商人であった。

初代忠兵衛の時代の彼の貿易業との関わりについては、伊藤忠商事の社史は、忠兵衛が甥の外海鉄次郎とともに、神戸に1885（明治18）年に伊藤外海

3) この点について筆者は若林幸男・大島久幸・山藤竜太郎編（2022）で高島屋飯田を扱った第4章の第1節「高島屋飯田の豪州上陸」でも改めて指摘した。

組を設け、対アメリカ雑貨貿易を始めたとされてきた⁴⁾。しかし2003年に発見された「伊藤忠兵衛家文書」に依拠して研究を進めてきた滋賀大学の宇佐美英機氏により、この外海鉄次郎との貿易事業については、かなりの修正がなされたのである⁵⁾。

宇佐美氏によれば、まず1889年3月に神戸・京都・横浜などの商人たちの出資によって日本雑貨商社という商社が設けられ、サンフランシスコに支店を置くにいたっていた。たが翌90年2月に、この商社の出資者たちの間で不和が生じて横浜の株主が退社してしまうという事態が起こる。伊藤忠兵衛と甥（忠兵衛の姉せいの息子）の外海鉄次郎は、この退社した株主たちの出資分を埋めるべく、新たに株主として参加したのであった。2人が新たに株主として加入した後、5月に外海は監督役としてサンフランシスコ支店へ出張した。しかし翌91年春に、この商社は資本金の不足を生じ、株主間でさらなる葛藤が生じたため解散の危機を迎えた。そこで忠兵衛は6月に帰国した外海と協議し、サンフランシスコ支店を買い入れることとし、9月には、そのサンフランシスコ支店を含んで、大阪に本社を置き、忠兵衛、外海に忠兵衛の縁戚筋にあたる出路久右衛門を加えた3人の出資で、日本雑貨貿易商会⁶⁾なる商社を組織し再スタートを切ることになったが、さらに1893年6月ごろまでに忠兵衛と外海らは、この日本雑貨貿易商会を伊藤外海組と改め新会社を設立した。伊藤外海組は本店を神戸に、支店をサンフランシスコに、また新たに横浜に出張所を置いた。94年7月には新たに鶴谷忠五郎と上柳幸吉が出資者に加わった。鶴谷は日本雑貨貿易商会時代からサンフランシスコ支店に勤務していた者で、また上柳は神戸本店の支配人であった。だが伊藤外海組は、95年にサンフランシスコ店勤務の鶴谷忠五郎に譲渡され、解散した。この解散については、従

4) 伊藤忠商事株式会社社史編集室編（1969）17頁。

5) 初代忠兵衛時代の貿易事業については、宇佐美英機（2006）、同（2022）に拠る。

6) 日本雑貨貿易商会は、日本雑貨貿易商社と記されることもあったという。宇佐美英機（2022）52頁。

来伊藤忠商事の社史などでは、外海鉄次郎が病気になってしまったためとされてきたが、宇佐美氏は、「外海が病気であったということを証明できる史料は欠けている」とし、解散はむしろ忠兵衛や外海の関心が、日清戦争の勝利による「新占領地」での商いに移ったためではないかということを示唆されている。外海鉄次郎による清国渡航を経て、1895年に忠兵衛は日東合資会社を設立している。この会社は上海支店を設置し、そこに外海を常駐させて、綿製品を取り扱った。同社は翌96年には日東綿糸株式会社に組織替えし、さらに解散、また日東洋行を創設したが、まもなく消滅したという。そして忠兵衛は1903（明治36）年7月に逝去するのである。そして宇佐美氏は、伊藤家の貿易事業への本格的参入は2代目忠兵衛の時代に委ねられることになったとしている。

このように初代忠兵衛の時代には対米貿易、対清貿易に乗り出していたが、そこで海外に駐在して貿易実務にあたった外海鉄次郎や鶴谷忠五郎⁷⁾のような要員のスキルが、2代目忠兵衛の時代に本格化する貿易事業への参入時に継承されることはなかったとみられる。

2 2代目伊藤忠兵衛時代

(1) 次男精一の家督相続

初代忠兵衛が亡くなった後、次男の精一が家督を相続し、伊藤忠兵衛を襲名した——次男の精一が相続したのは長男の万治郎が生後すぐに亡くなっていたためである（以下では精一ではなく襲名後の忠兵衛を用いる）。この時、2代目忠兵衛はまだ17歳であり、滋賀県立商業学校に在籍していた。彼は同校卒

7) 伊藤外海組のサンフランシスコ店を譲渡された鶴谷忠五郎は、1898（明治31）年までアメリカ滞在を続け、日本に帰国した後は神戸で鶴谷商店を開き、京都の陶磁器業者である3代目松風嘉定との関係を深めていたことは、木山実（2020）8頁以下を参照されたい。

業後は東京高商への進学を希望していたが、在学中に家督を継いだことで、親族や番頭の中からは東京高商への進学断念はもちろん、滋賀県立商業もすぐに退学して家業を継ぐよう求める声も上がったという。しかし母親の意見で忠兵衛の滋賀県立商業卒業を待つことになった。この間、姉婿の伊藤忠三が店主代理として指揮をとった⁸⁾。

(2) 韓国への展開

翌1904年に忠兵衛は無事に滋賀県立商業を卒業し、伊藤本店に入った。その年の2月に日露戦争が勃発しており、勃発当初経済界は混乱したものの、9月ごろには好況に転じ、日本から韓国や清国向けに綿製品が盛んに輸出されるようになった。そこで伊藤忠でも、まずは韓国に店員田中清吉と高井兵三郎を同年10月に派して市場動向を視察させた。

視察の結果、韓国市場が有望視されたので、同年（04年）、本店内に輸出部を設け、輸出の準備に着手した。そして韓国への進出を決定し、07（明治40）年1月には京城出張所を開設し、その主任に高井兵三郎を任命して京城に駐在させた⁹⁾。

京城出張所では、日本の繊維製品の韓国売り込みに当たったが、韓国商人らで組織された組合組織「共益社」とも取引を始めた。伊藤忠側はこの「共益社」との取引を通じて、その韓国経営者らの堅実さや人柄をみ、同社との提携拡大を計画するようになり、これを韓国経営者たちに申し入れたところ受け入れられたため、1909年8月に伊藤忠側と韓国側の共同投資によって「共益社」を株式会社化した。新会社の社長には株式会社化される前の「共益社」の時代からこれに関与していた韓国商人の朴承稷が就き、伊藤忠からは当初韓国視察に派遣された田中清吉が取締役に、高井兵三郎が輸入部長となった。また初代忠兵衛が亡くなった後、2代目忠兵衛が家業を継ぐまでの時期とその後

8) 伊藤忠商事株式会社社史編集室編（1969）37頁。

9) 伊藤忠商事株式会社社史編集室編（1969）39頁。

も2代目忠兵衛を支えた姉婿の伊藤忠三もこの会社の監査役に就いている。株式会社「共益社」の設立と同時に伊藤忠の京城出張所は廃止されたが、新たに設立された「共益社」が京城出張所の機能を事実上継承したとみてよいであろう¹⁰⁾。

1904年に韓国視察のために派遣され、また新「共益社」の重要ポストに就いた2人のキャリアをみると、まず田中清吉は伊藤忠兵衛家と同じ犬上郡豊郷村の出身で、1884年に12歳の時に伊藤本家に入店した。年齢からみて小学校出でであろう。彼は1908年に伊藤忠の輸出部が本店から分かれて輸出店となつてからは、その支配人となり貿易部門の発展につくした人物である¹¹⁾。

一方、高井兵三郎は、1881年に伊藤忠兵衛家のある犬上郡に比較的隣接する蒲生郡日野町に生まれ、2代目忠兵衛と同じ滋賀県立商業を卒業した後、伊藤本店に採用となった人物である¹²⁾。田中、高井はともに近江の湖東地域出身であり、伊藤忠がまだ大規模な商店ではなかった頃に、地元の地縁を活かして採用された人材であったということになる。

(3) 清国への展開

伊藤忠では韓国市場の開拓と並行して清国市場にも進出することとし、韓国視察から帰国した田中清吉に命じて、日露戦争から戻った中村信太郎を同道させて、1906（明治39）年2月に清国に派遣し、その主要市場を調査させた。田中清吉は半年後には帰国したが、中村信太郎は留まって華南地方一円をも調査し、同年11月に帰国した。

彼らの報告を受けて伊藤忠は清国上海への出店を決めたが、上海での取引経験の蓄積もないことから、イギリス租界に出張所を置き、日本に帰ってきたば

10) 伊藤忠商事株式会社社史編集室編（1969）49頁。

11) 伊藤忠商事株式会社社史編集室編（1969）39頁の注11。

12) 宇佐美英機編（2012）216頁の注64。滋賀県立商業学校の卒業生名簿で確認すると、高井兵三郎は第16回卒業生（1899年4月卒）で、第21回卒業生である2代目伊藤忠兵衛の5年先輩である。高山音治郎編（1940）10頁、17頁。

かりの中村信太郎が主任として1906年12月から常駐し、すでに上海に日信洋行の名で出店していた日本綿花の好意を受けて、日信分行の名義で翌07年に上海店を開いて営業を始め、日本産の繊維製品の売り込みにあたった。この上海店には主任中村信太郎の下に斎藤藤蔵という店員がおり、また1909年頃には石黒昌明や現地採用の清国人も雇用されていたようである¹³⁾。この上海店は、1909年の年末に伊藤洋行に商号を変えている¹⁴⁾。

伊藤忠では、さらに清国市場を開拓するべく、上海店の管轄の下、1910年に漢口に信昌洋行の商号で石黒昌明を主任として支店を開設した。この信昌洋行という商号は、伊藤の看板を掲げて本店に迷惑をかけないようにという配慮から、上海店主任の中村信太郎と漢口店主任となる石黒昌明から1字ずつとって信昌洋行と称したものであった。漢口店には主任石黒のほか現地人の営業担当者と雑役の者、合計3名が雇用されていたという¹⁵⁾。上述の通り石黒昌明は当初上海店で勤務しており、漢口店開設に際し、上海から漢口に移ったということになる。

その後、清朝が倒れて1912（明治45）年に中華民国（中国）が成立し、さらに日本経済が14（大正3）年に勃発した第一次世界大戦による好況、いわゆる大戦景気で沸くなか、伊藤忠は中国市場のさらなる開拓を進めるべく、15年8月に天津出張所を設けたが、その主任には漢口店主任であった石黒昌明が充てられた。漢口店では、天津に転勤となった石黒の後の主任に奥田沢二が就いた¹⁶⁾。さらに伊藤忠は1916年に青島出張所を設け、その主任に淵田太郎を充てている¹⁷⁾。

13) 斎藤藤蔵は伊藤忠商事株式会社社史編集室編（1969）47頁に上海店の店員として名があるし、同48頁にある「発足当時ノ上海支店員」という写真に石黒昌明の名前がみられ、また背広を着た日本人店員に混じって、いわゆる中国服を着た若者数人が映っている。

14) 伊藤忠商事株式会社社史編集室編（1969）40頁、47-48頁。

15) 伊藤忠商事株式会社社史編集室編（1969）48頁。

16) 伊藤忠商事株式会社社史編集室編（1969）49頁、64頁。

17) 伊藤忠商事株式会社社史編集室編（1969）64頁。

伊藤忠が清国・中国で店舗展開するに際し、現地の駐在員として勤務した日本人のキャリアについてみておこう。まず上海店の最初の主任となった中村信太郎についてであるが、彼は1882年に近江神崎郡伊達村に生まれた人物である。1899（明治32）年に京都商業学校を卒業し、同年6月に伊藤本店に入店した。彼は京都商業の卒業時には、高島屋（飯田）への入店を希望していたという。京都商業学校では地元の高島屋（飯田）に入ることがもっとも理想とされ、彼も高島屋入りを希望したがかなわず、次に三井物産大阪支店の門を叩いたというが、それもかなわず、卒業後の進路で途方に暮れていたところ、同郷の伯父が伊藤忠入りを勧めた。伯父は伊藤本店の店員とコネクションがあったというのである¹⁸⁾。中村信太郎の郷里神崎郡もいわゆる湖東地域であるから、彼も地元の地縁を活かして雇用された人材とってよいであろう。彼は1914（大正3）年末の時点でも上海支店主任（支配人）の地位にあったし、また1918（大正7）年末の組織改編で伊藤忠商事が発足した際、その取締役に就いている¹⁹⁾。

上海で中村信太郎のもとで勤務した斎藤藤蔵については生年、出身地などは不明だが、滋賀県立商業学校の卒業生名簿に第24回（1907年3月）の卒業生として名前がある²⁰⁾から、同年に設置されたばかりの上海店の要員として、商業学校出身者である斎藤が派遣されたとみられる。

上海店で勤務し、漢口店開設時にその主任として勤務した石黒昌明については、彼が上海に置かれた東亜同文書院の5期生であるという指摘がある²¹⁾。そこで東亜同文書院の卒業生名簿²²⁾に当たってみると、確かに第5期（1908年6

18) 宇佐美英機編（2012）165-166頁、217頁の注65。

19) 伊藤忠商事株式会社社史編集室編（1969）57頁、71頁。

20) 高山音治郎編（1940）23頁。

21) 藤田佳久編（2020）208頁。石黒昌明は2017年にノーベル文学賞を受賞したイシグロ・カズオの祖父である。

22) 『会員名簿』（1923）卒業生氏名、202頁、松岡恭一・山口昇編（1908）後部の名簿、43頁。

月卒）商務科の卒業生に石黒昌明の名前を見出すことができ、その出身地は滋賀県大津市とされている。石黒昌明は伊藤忠に入る前には外務省嘱託であったという²³⁾。この石黒が天津出張所設置により天津主任として転出した後に漢口店の主任となった奥田沢二は、東亜同文書院・商務科の第7期（1910年6月）の卒業生で、本籍地は広島である²⁴⁾。後述するように、石黒昌明が伊藤忠に入った後には、この奥田沢二のように東亜同文書院の卒業生が相次いで伊藤忠入りし、伊藤忠の海外展開を支えていくことになる。東亜同文書院の卒業生として初めて伊藤忠入りした石黒が同書院の後輩を招き入れた可能性が十分考えられるのであり、その意味でも石黒の伊藤忠入りの意義はきわめて大きいといわねばならない。

青島出張所の主任となった淵田太郎は、1890（明治23）年3月に三重県に生まれ、1911年に神戸高商を卒業後、伊藤忠に入った人物である²⁵⁾。この時期、高商のような高等教育機関の出身者で伊藤忠への就職を希望する者はほとんどおらず、この淵田の採用についても、2代目伊藤忠兵衛が1909年にイギリスに留学した際の途上で寄ったアメリカで知遇を得た井上準之助——のちの日本銀行総裁、大蔵大臣——の紹介で、神戸高商校長の水島鉄也校長に願い出て、ようやく採用にいたったという²⁶⁾。

（4）フィリピンへの展開

伊藤忠は南方向けの商品を神戸や大阪川口の外商に売り込んでいたが、日露戦争後には直接取引を模索することになり、1909（明治42）年8月に店員の井上富三と藤野政次郎をフィリピンのマニラに視察のために出張させた。この出張時には現地商社と取引契約を結ぶことができたので、伊藤忠の対フィリピン

23) 藤田佳久編（2020）225頁。

24) 『会員名簿』（1923）卒業生氏名、206頁。

25) 東邦通信社編（1930）「ふ」の部、8頁。

26) 伊藤忠兵衛翁回想録編集事務局編（1974）155頁。

ン貿易は伸張した。そこで翌 1910 年 1 月にマニラに出張所を設置し、前年に派遣されていた藤野政次郎を主任とした。ここでは主に綿布などの綿製品の売り込みがなされたが、繊維製品のほか雑貨、農産物の販売にも手を手を挙げた。またフィリピン産原材料の日本向け輸出にも当たり、商権を拡大したので、1912（大正元）年 9 月に出張所を支店に格上げした²⁷⁾。その後、14 年末までにマニラ支店の支店長は田中寛に交代している²⁸⁾。

伊藤忠のフィリピンへの店舗展開に関与した要員のキャリアについては、1909 年に初めて視察のためにマニラに派遣された井上富三は、1882 年 6 月に福井県遠敷郡熊川村に生まれ、1908（明治 41）年に東京高商を卒業後すぐに伊藤忠入りした人物である²⁹⁾。彼は伊藤忠で採用された最初の東京高商卒業生である。伊藤家では 1905 年から本店と糸店の年少の店員に毎夜店内教育として、商事要項、簿記、算術、英語、国語などの講義を行っていた。高級店員や外部から招いた講師がこの講義を担当していたが、井上は東京高商の在学時から春夏の休暇を利用して講師となり、本店に入店した後も続いて教えた。伊藤忠の地元滋賀県ではない福井県出身の井上富三が東京高商在学時から伊藤家に入入りしていたのは、どういう経緯からだったのか。それは伊藤家同族の一員として 2 代目忠兵衛を支えたとされる伊藤竹之助が、井上富三と同郷で幼なじみの関係にあり、この伊藤竹之助が井上を招いたのである³⁰⁾——伊藤竹之助については後述する。井上富三はマニラ視察に赴いたとはいえ、そこに駐在せず、また伊藤忠の他の海外店舗の主任（支配人）を勤めるようなことはなく、国内業務の方で活躍し、伊藤家諸事業の重役を歴任することになる。

井上富三とともにマニラを視察し、マニラ出張所開設後にその主任となった藤野政次郎については、筆者はその経歴を知らないが、滋賀県立商業学校や京

27) 伊藤忠商事株式会社社史編集室編（1969）51 頁、616 頁。

28) 伊藤忠商事株式会社社史編集室編（1969）57 頁。

29) 宇佐美英機編（2012）216 頁の注 61。

30) 筒井芳太郎（1952）10 頁。

都商業学校の卒業生名簿に藤野の名は見あたらないから、この両校の卒業生ではないのだろう。伊藤忠がマニラに視察員を派遣する以前、藤野政次郎は神戸や大阪川口の外商に南洋向けの商品を売り込んでいたという³¹⁾。

藤野の後にマニラ支店長になった田中寛は、東亜同文書院・商務科を1910年6月に卒業した人物で、本籍地は山梨である³²⁾。田中寛は、上述した漢口店主任となった奥田沢二の東亜同文書院時代の同期生である。

(5) インドへの展開

伊藤忠は大戦景気の波によってインドへの進出を決め、1916（大正5）年3月に功力寅次を同地に派遣し、綿製品市場の調査や販路開拓に当たらせた。さらに18年3月には池田広三郎をインドに出張させ、同年8月にカルカッタ出張所を開設し、さらに松島庄一郎、瀬藤保三を同地に派遣している³³⁾。

最初にインドに派遣された功力寅次は、東亜同文書院・商務科の第8期生（1911年6月卒）であり、本籍地は山梨である³⁴⁾。次に派遣された池田広三郎は京都商業学校の1910年の卒業生とみられる³⁵⁾。また松島庄一郎は東亜同文書院・商務科・第9期生（1912年6月卒）で、本籍地は和歌山である³⁶⁾。瀬藤保三は神戸高商の1916年の卒業生で、彼も本籍地は和歌山である³⁷⁾。

(6) ニューヨーク支店の開設

伊藤忠では大戦景気のなか、従来の綿製品中心主義から取扱品の多角化を進めることにし、アメリカ進出を決めた。日本の貿易業界では、この時期、取扱

31) 伊藤忠兵衛翁回想録編集事務局編（1974）51頁。

32) 『会員名簿』卒業生氏名、（1923）206頁。

33) 伊藤忠商事株式会社社史編集室編（1969）67頁。この社史に明記されていないが、カルカッタ出張所開設時の主任は池田広三郎であったとみられる。

34) 『会員名簿』卒業生氏名、（1923）208頁。

35) 喜多川敬二編（1938）80頁。

36) 『会員名簿』（1923）210頁。

37) 神戸高等商業学校編（1919）158頁。

品の総合化を目論む商社が続出した³⁸⁾が、その流れに乗ったものであったとい
ってよいであろう。

伊藤忠はまず1917（大正6）年8月にアメリカ市場の調査と支店設置の準備
のため荒田銀之助を、次いで同年11月には足立仁郎をニューヨークに派遣し
た。さらに2代目忠兵衛が自らニューヨークに赴いて18年5月に支店を開設
したというから、並々ならぬ力の入れようである。そして同年7月にはその支
店長に、上で述べたインドに最初に派遣された功力寅次が着任した。このニ
ューヨーク支店は、フィリピン産マニラ麻の輸入、アメリカ綿布のフィリピン
向け輸出、日本向けの機械、鉄鋼、重化学工業品の輸出などにあたって商権拡
大に努めた³⁹⁾。

ここでも最初に派遣された2人のキャリアをみておこう。最初に派遣された
荒田銀之助は、（神戸高商ではなく）神戸商業学校を1912年に卒業した人物で
あり、本籍地は京都で、卒業後は伊藤忠の神戸支店で勤務していた⁴⁰⁾。足立仁
郎は東北帝国大学農科大学（後の北海道帝大）農学科の1915（大正4）年の卒
業生であり、出身地は兵庫県氷上郡のようである⁴¹⁾。伊藤忠の人員で帝大の卒
業生は、この足立仁郎が最初ではないかと思われる。

なお伊藤忠では1917年にシアトルにも常駐員を置き、19年1月にはこれを
出張所としたとのことであるが、社史にはその要員の名前は記されていな
い⁴²⁾。

（7）イギリスへの展開

伊藤忠はアメリカに続いてイギリスにも進出することとし、1919（大正8）
年3月に、マニラ支店長であった田中寛をロンドンに派遣し、同年12月に

38) 大森一宏・大島久幸・木山実編（2011）第4章。

39) 伊藤忠商事株式会社社史編集室編（1969）65頁、73頁。水谷渉三編（1924）328頁。

40) 兵庫県立神戸商業学校編（1915）110頁。

41) 廣瀬虎四郎編（1924）7頁。勤務先は伊藤商会と記載されている。

42) 伊藤忠商事株式会社社史編集室編（1969）65頁。

張所を開設した。ロンドン出張所は、日本との取引だけでなく、中国などとの三国間貿易にも従事した⁴³⁾。

本稿冒頭で述べたように、伊藤忠の事業は20（大正9）年の反動恐慌の影響をまともに受けて大欠損を出したために、大幅な人員削減と業務縮小を迫られることになる⁴⁴⁾。

3 伊藤竹之助の功績

以上、伊藤忠の貿易事業が本格化したとされる2代目伊藤忠兵衛の時代を中心に、その海外展開の要員に重点を置いてみてきたが、明治末期に最初に進められた韓国・清国への展開では、伊藤忠兵衛家の本宅から比較的近接した地域の出身で、さらに滋賀県立商業学校や京都商業学校という比較的近接した地元の商業学校の卒業生が、その要員に充当されていたことが知られる。このような傾向が変化する契機は、マニラに視察のために派遣されることになる井上富三の採用であろう。東京高商出身の井上の採用後、伊藤忠では海外派遣要員に東亜同文書院や神戸高商、さらには東北帝大という高等教育機関の卒業生にも採用を拡大し、さらにそれと連動して、近江（滋賀）出身ではない者にも採用を拡大したのである。その意味で、井上富三を伊藤忠に招き入れた伊藤竹之助の存在は重要であると考えられる。

伊藤竹之助は伊藤姓を名乗っているが、もともとは逸見^{へんみ}竹之助を名乗っており、伊藤家に婿入りした人物である。彼は1883年7月に井上富三と同じ福井県遠敷郡熊川村に生まれた。井上より1歳年下ということになる。彼は同村で酒造業の営む逸見勘兵衛の次男として生まれ、その後、滋賀県立商業学校に進

43) 伊藤忠商事株式会社社史編集室編（1969）73頁。

44) その後再起がはかられるなか、本稿で登場した人員のうち中村信太郎、功力寅次、井上富三、淵田太郎、田中寛などはその後も伊藤忠兵衛や伊藤竹之助の下で伊藤家事業を支えていくことになる。伊藤忠商事株式会社社史編集室編（1969）533頁以下の「歴代役員」を参照。

学して1900（明治33）年3月に同校を卒業した。翌年に伊藤忠入りして1年のブランクがあるが、それは卒業時に健康を害して静養していたためであるという。竹之助の滋賀県立商業時代の成績はきわめて優秀で、竹之助と同期卒業で成績も良好であった大橋又次郎という人物が一年前に伊藤忠に入っていた⁴⁵⁾ことも竹之助の伊藤忠入りに影響したと思われる。入店後の竹之助は期待に違わず実直に勤務したことが認められたのであろう。1907（明治40）年7月に初代忠兵衛の長女ときの娘ふきの婚養子となり、伊藤家に入籍する⁴⁶⁾。

上述の通り、竹之助は同郷で幼なじみの井上富三との親交は続き、井上が東京高商に進学した後、在学中の彼を伊藤家に店員教育の講師として招いていた。そして卒業と同時に、井上は伊藤忠入りすることになる。

前節で述べたが、伊藤忠の海外展開にとって重要であったと思われるもう一人の人物が石黒昌明である。彼は東亜同文書院を卒業後、上海支店で採用され、伊藤忠が漢口や天津にも支店を設置した際、その主任となって赴任したが、石黒の採用後、前節でみたように、東亜同文書院の卒業生の伊藤忠入りが相次ぐのである。しかも同文書院の卒業生たちは、中国方面で活躍するばかりではなく、フィリピン、インド、アメリカ、イギリスでの展開時にも活躍していたことは前節でみた通りである。彼らの伊藤忠入りには、石黒昌明の伊藤忠入りとその活躍が大きく影響しているであろう——石黒が後輩たちを招き入れたケースもあったと思われる。では、この石黒昌明はどのような経緯で伊藤忠に入ったのであろうか。前節でこの石黒が滋賀県大津市出身であると述べたが、彼の同郷意識に伊藤忠が働きかけてリクルートした可能性はあるだろうが、より重要なのは石黒昌明が東亜同文書院に進学する前、伊藤家に婿入りする前の若き逸見竹之助と滋賀県立商業学校で同期生であった⁴⁷⁾という事実であろう。伊藤竹之助は同郷の井上富三のみならず、東亜同文書院に進学した石黒

45) 伊藤忠兵衛翁回想録編集事務局編（1974）157-158頁。

46) 伊藤忠商事株式会社社史編集室編（1969）37頁の注6。

47) 高山音治郎編（1940）17頁。

昌明も伊藤忠に招き入れたとみられるのである。

逸見竹之助が伊藤家に婿入りしたのは、1907（明治40）年7月であり、井上富三、石黒昌明の伊藤忠入りはそれからそれほど時間を経ずに実現している。伊藤家に入って重役に列せられた竹之助は、意気盛んに、自身と交友関係にあった優秀な人材にあたってリクルートしていたとみられるのである。

むすびにかえて　－滋賀県立商業学校第17期生のつながり－

逸見改め伊藤竹之助と石黒昌明は、滋賀県立商業学校の第17期生（1900年3月卒）であったが、この第17期生には児玉一造も在籍していた。児玉一造は三井物産に入って、特にその棉花部で大いに活躍し、棉花部が1920（大正9）年に分離独立して東洋棉花が設けられた際には、その経営者になったことで知られる人物である。その実弟、児玉利三郎は織機製造や織布業を営む豊田佐吉家に婿入りして豊田利三郎となり、1937（昭和12）年にトヨタ自動車が設けられた時に、その初代社長に就くことになる。

石黒昌明は豊田佐吉が1922（大正11）年に上海に豊田紡織廠を設けた際、そこに入社して役員に就いているが、石黒の豊田紡織廠への入社を薦めたのは、児玉一造と2代目伊藤忠兵衛であった⁴⁸⁾。

そもそも児玉利三郎の豊田家への婿入りは、兄の児玉一造が三井物産名古屋支店長時代に名古屋の豊田佐吉を支援したことで深まった豊田との交友関係を前提として成立したものである。この利三郎は東京高商の専攻部を出た後、伊藤忠で勤務したことがあった。児玉利三郎の伊藤忠入りに際しては、当時三井物産ロンドン支店に勤務していた兄児玉一造から2代目伊藤忠兵衛に斡旋の依頼があり、それに応じたという回顧を2代目忠兵衛に残している。2代目忠兵

48) 山崎広明（2015）87-88頁。ただし山崎広明氏は石黒昌明と児玉一造が滋賀県立商業の同期生であったことを認識せず、この2人が東亜同文書院の同期生であったという誤った解釈をされている。

衛は明治末にロンドンに留学したことがあったが、児玉一造はその時にはロンドン勤務であり、ロンドン滞在時には児玉一造に相当にかわいがってもらったというのである⁴⁹⁾。このように、滋賀県立商業第17期生の3人と2代目忠兵衛は、非常に緊密な関係にあったといえるが、2代目伊藤忠兵衛に児玉一造を引き合わせたのも、また伊藤竹之助であったと想像されるのである。

参考文献

- 伊藤忠商事株式会社社史編集室編（1969）『伊藤忠商事100年』伊藤忠商事。
- 伊藤忠兵衛翁回想録編集事務局編（1974）『伊藤忠兵衛翁回想録』伊藤忠商事。
- 宇佐美英機（2006）「初代伊藤忠兵衛と「伊藤外海組」小史」『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』第39号。
- 宇佐美英機編（2012）『初代伊藤忠兵衛を追慕する－在りし日の父、丸紅、そして主人－』清文堂出版。
- 宇佐美英機（2022）「初代伊藤忠兵衛と日本雑貨貿易商社開業の経緯」『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』第55号。
- 大森一宏・大島久幸・木山実編（2011）『総合商社の歴史』関西学院大学出版会。
- 岡本藤次郎・石田退三編（1958）『豊田利三郎氏伝記』豊田利三郎氏伝記編纂会。
- 『会員名簿』〈大正12年11月現在〉（1923）上海東亜同文書院同窓会。〔編著者名なし〕
- 喜多川敬二編（1938）『京都市立第一商業学校同窓名簿（昭和13年12月現在）』京一商同窓会。
- 木山実（2009）『近代日本と三井物産－総合商社の起源－』ミネルヴァ書房。
- 木山実（2017）「高島屋の貿易業参入過程における人材形成－貿易商社「高島屋飯田」創設前史－」関西学院大学『商学論究』第64巻第3号。
- 木山実（2020）「松風工業に関する試論－3代目松風嘉定の考察を中心に－」関西大学経済・政治研究所『研究双書』第170冊。
- 神戸高等商業学校編（1919）『神戸高等商業学校一覧（大正7年）』同校。
- 高山音治郎編（1940）『近江尚商會会員名簿（昭和15年12月調）』近江尚商会。
- 筒井芳太郎（1952）『財界人物読本』経済往来社。
- 東邦通信社編（1930）『現代日本人名大辞典（昭和5年版）』東邦通信社。
- 兵庫県立神戸商業学校編（1915）『兵庫県立神戸商業学校一覧（明治45年－大正4年）』

49) 岡本藤次郎・石田退三編（1958）後ろの「辱知諸家回想録」11-12頁。

同校〈関西学院大学図書館所蔵史料〉。

廣瀬虎四郎編（1924）『学会会員氏名録（大正13年）』学会事務所。

藤田佳久編（2020）『東亜同文書院卒業生の軌跡を追う』あるむ。

松岡恭一・山口昇編（1908）『日清貿易研究所東亜同文書院沿革史』東亜同文書院学友会。

水谷渉三編（1924）『紐育日本人発展史』1、紐育日本人会。

山崎広明（2015）『豊田家紡織事業の経営史－紡織から紡織機、そして自動車へ－』文真堂。

若林幸男・大島久幸・山藤竜太郎編（2022）『国際人的資源管理の経営史－戦前期日本商社の豪州羊毛ビジネス－』日本経済評論社。